

A 語句の意味と読み

- (1) おほんとき／御代（帝の治世）
- (2) 高貴だ・格別だ / 「際」＝身分、と続く
- (3) （帝の）寵愛を受けて栄える / ×「時流に乗る」ではない
- (4) 目にあまる・氣にくわない（不快だ） / ★現代語の「目ざましい（すばらしい）」ではない
- (5) げらふ（げろう）／身分の低い者
- (6) 心が穏やかでない・おだやかでいられない
- (7) 篤しく＝病気が重く 里がちなる＝実家に下がりがちである

B 文法

- (8) 「ありけむ」（あらむ）などが省略されている。係助詞「か」の結びが省かれているため。
- (9) 打消の助動詞「ず」の連体形 / 下に「が（＝方）」が続くので連体形
- (10) 「や」＝係助詞（疑問）／「けむ」＝過去推量の助動詞（連体形。「や」の結び） / 「～であったのだろうか」
- (11) ～できない（不可能）

- (12) 「ぬ」＝強意（確述）の助動詞「ぬ」の終止形／「べき」＝推量（当然）の助動詞「べし」の連体形 / 「きっと～になっちゃいそうな」

C 敬語と敬意の方向

- (13) 「さぶらひ」＝謙譲語。作者から帝への敬意／「たまひ」＝尊敬語。作者から女御・更衣への敬意 / ★一語の中に二方向。最頻出
- (14) 尊敬語／作者から御方々（女御たち）への敬意
- (15) 尊敬語／作者から御方々（女御たち）への敬意
- (16) 「思ふ」の尊敬語／作者から帝への敬意
- (17) 最高敬語（二重敬語）／帝への敬意 / ★帝や中宮など、最も高い方にだけ使う

D 口語訳

- (18) どの帝の御代のことであったらうか。
- (19) （その更衣を）氣にくわない者として見下し、ねたまなさる。
- (20) たいそう病気が重くなっていき、なんとなく心細そうに実家に下がりがちであるのを、
- (21) 人の非難をもお氣になさることがおできにならず、

E 内容・記述（解答例）

(22) それほど高貴な家柄の出ではない、女御より下の身分の更衣。

(23) 身分が高くないのに、帝の寵愛をひとりじめしていたから。ねたんだのは「はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々」（女御たち）と、「同じほど、それより下臈の更衣たち」。

(24) 人々の恨みを受け続けて心労が重なり、病気が重くなったから。帝はそれを見て、ますますこの上なくいとしいものとお思いいになった。

(25) 帝の更衣への扱いが、のちの世の語り草になってしまいそうなほど、度をこえたものであったということ。

F 文学史

(26) 紫式部／平安時代（中期）／五十四帖

(27) 作り物語（つくりものがたり）

(28) 『竹取物語』

【現代語訳（全文）】

どの帝の御代のことであったらうか、女御や更衣が大勢お仕えなさっていた中に、それほど高貴な身分ではない方で、格別に帝の寵愛を受けていらっしゃる方があった。

（入内の）はじめから「自分こそは」と自負していらっしゃる女御の方々は、（その更衣を）気に入らない者として見下し、ねたまなさる。同じ身分、あるいはそれより低い身分の更衣たちは、まして心穏やかでない。

朝夕の宮仕えにつけても、人の心をひたすら乱すばかりで、恨みを受けることが積み重なったせいであろうか、たいそう病気が重くなっていき、なんとなく心細そうに実家に下がりがちであるのを、（帝は）ますますこの上なくいとしいものとお思いいになって、人の非難をもお気になさることがおできにならず、世の語り草にもなってしまいそうなお扱いである。